追手門学院大学人間学部紀要
2005年2月28日，第18号，63-81

スウェーデンの保育と幼児教育

善積京子・森　陽子*

Childcare and Early Childhood Education in Sweden

Kyoko YOSHIZUMI and Yoko MORI*

要約

スウェーデンの保育事業は、男女平等政策や労働市場とリンクした家族政策の一環として重視され、過去30年間に飛躍的に発展してきた。近年、幼児教育の重要性が認識されだし、生涯学習の出発点として保育所が位置づけられるようになる。1990年後半から教育システムの大改革で、保育行政は学校庁の管轄に移り、保育所はプリスクールに名称変更し、プリスクールのための学習プランも基礎学校と同様に定められる。そこでは、プリスクールでの活動は民主主義的価値観に基づき遂行されるべきであることが謳われ、団結力と忍耐力を早期に確立し、社会生活を責任もって営なめる能力を子どもに身につけさせることが目標とされる。プリスクールの現場では、その目標の達成のための実践的方法が探究されている。

キーワード：保育、幼児教育、民主主義教育、スウェーデン

* 大阪府高槻市立第七中学校　教諭

はじめに

スウェーデンの保育事業では、親が就労や就学中の子どもの保育の必要性をみたすと同時に、子どもに教育的な刺激にみちたグループ活動の場を保障することを目標としてきた。こうした、親の福祉的需要と子どもの教育的必要性を1つの事業体でみたすというスウェーデンの保育事業のモデルは、世界的にも注目されている。近年はますます、保育に高い質の教育的活動が求められ、生涯学習の出発点として保育所が位置づけられるようになる。1990年後半から大改革が行われ、保育行政は、社会庁から学校庁に管轄が移り、法的根拠は社会サービス法から学校法になり、保育所はプリスクールに名称変更された。

本稿の目的は、就学前の子どもの保育と教育がスウェーデンではどのように統合的に実践されているのかを明らかにすることにある。第1節では、まずスウェーデンにおける保育事業を概観し、第2節では、国によって定められたプリスクールの教育大綱「1998年プリスクール学習プラン」の内容を紹介し、さらに第3節では、その理念・目標・指針が、現場のプリスクールにおいてどのように具体化されているかをイェーテボリ市オリグリー地区の事例を通して検討する。

1．スウェーデンの保育事業の概要

（1）保育政策の沿革

スウェーデンの保育政策は、男女平等政策や労働市場とリンクした家族政策の一部として重視され、過去30年間に飛躍的に発展してきた。1970年代初めに政府は、高い質の保育・全児童への保育提供・公的財源の投入という保育政策における指針を発表し、それに従って改革を進めてきた。そしてスウェーデンの保育政策では、①子育てと仕事や勉学との両立を可能にさせることと、②子どもの成長にとって良い環境を提供することが目指されてきた(注1)(Socialdepartementet, 1996)。

幼児を抱える母親の就労率の伸びに対応して、保育所は増設され、多くの子どもが就学前に保育所に通所するようになる。保育所や家庭保育所に預けられていた子どもは、1970年には約6万人にすぎなかったが、1990年には36万人以上にも増加する。こうした保育の拡大に伴い、次第に保育での教育的政策の意義が増し、高い質の教育的活動を通じて、子どもの発達を刺激し、学習を支援していくことが保育所に求められるようになり、1990年後半から大改革が行われた。

1996年7月に保育政策は社会省（Socialdepartemetet）から教育省（Utbildningsdepartementet）に移り、1998年1月から保育行政は社会庁（Socialstyrelsen）から学校庁（skolverket）に移管され、生涯学習の構成要素として保育所が位置づけられ、義務教育の学校との統合が目指される。この改革で、保育の法的根拠・規定は社会サービス法（Socialtjänstlagen）から学校法

(Skollgen) に基づくことになり、1998年8月に初めて学校法に保育に関する項目が加えられた。

この新しい学校法によって、保育所 (daghem) はプリスクール (förskole) と呼ばれることになり、プリスクールの教育の大綱を定めた「プリスクール学習プラン」が初めて1998年8月に作成される (この内容については、次節で詳しく紹介することにする)。

1998年の学校法は、親が仕事や勉学ができるように、あるいは子どものニーズに応じて、1歳から12歳の子どもに対して、プリスクール・保育ママや学童保育という形態で保育を提供することをコミューンの義務としている。そこでは、就労や勉学中でない親、育児休業取得中の親の子どもは、その適用の外に置かれてきた。そのために、これまで保育所に入所していた子どもでも、母親の出産で退所を余儀なくされるといったことが生じていた (善積　1999)。

その後、保育提供の対象範囲が拡大され、2002年1月からは親がその子どもの妹や弟のために育児休業を取得している場合にも、1週間に最低15時間の保育提供が義務とされるようになった。コミューンは、正当な理由がない限り、申し込みから3～4か月以内に、子どもの住んでいる地域のプリスクールや家庭保育所に預けられるようにしなければならない。さらに2003年1月から、すべての4歳児と5歳児は、4歳になった年の秋から、プリスクールを利用できるようにすること、また、発達に障害をもつ子どもに対して特別なサポートを提供することが、コミューンの責任とされる (Skolverket　2003)。

ちなみに1998年の学校法では、すべての6歳児に教育の場としてプリスクール・クラス (förskoleklass) を少なくとも年間525時間提供することがコミューンの義務となる。このプリスクール・クラスの教育目的は、それぞれの子どもの発達と学習を促して就学の基礎を提供すること、プリスクールと義務教育との接合を図ることである。コミューンにとってこのプリスクール・クラスを基礎学校 (grundskola、日本の小学校と中学校を合わせたような義務教育の学校) の中に設けることが義務となっているが、子どもにとってはこのクラスに通うことは自発的なもので、費用は無料である (Skolverket　2003)。

プリスクール・クラスには、原則として、その年に6歳になる子どもが全員入学することになっている。たとえば、1992年に生まれた子どもは1998年9月からプリスクール・クラスに入学する。したがって、1998年9月の入学時には、6歳8ヶ月の子どもも、まだ5歳と数ヶ月の子どももいる。時には、5歳の子どもも紛れ込んでいることもある。6歳児入学が原則とされているが、定員に充たない場合は5歳児でも希望すれば入学が可能である (善積　1999)。1998年末の統計をみると、全6歳児のうちの91%がプリスクール・クラスに、7%が義務教育課程に在籍しており、6歳児の大半が基礎学校に通学している (Gunnarsson & Korpi & Nordenstam　1999)。なお、基礎学校では、このクラスの生徒を通常0 (ゼロ) 年生やF (förskoleklassの頭文字を意味する) 年生と呼んでいる。

（2）保育の形態

スウェーデンでは、就学前や就学中の子どもに対して、さまざまなタイプの保育事業が存在している。保育事業は、就学前の子どもに対する保育と就学年齢の児童に対する保育の2つに大きく分けることができる。

A. 就学前の保育（基礎学校に行っていない1歳～5歳の年齢の子どもを対象）

① プリスクール(förskola) ----- 日本の保育所・幼稚園に相当するもので、1998年7月までは保育所（daghem）と呼ばれていた。プリスクールでは、子どもが登録され、土・日・祝祭日などを除き、毎日オープンしている。基本的には、就労あるいは就学している親をもつ子どもや障害児を対象にしている。しかし4歳児以上は、2003年から、自営などで親が家庭にいる子どもも含め、すべての子どもが入所できるようになる。

② 家庭保育所（familjedaghem）----- 自治体に登録している公共の保育ママが、自分の家で2人から10人まで1歳から5歳のさまざまな年齢の子どもを預かる。プリスクールと同じく、親が就労あるいは就学している子どもを対象としている。

③ オープン・プリスクール（öppen förskola）----- オープン・プリスクールは、家庭にいる子どもと親を対象に、子どもに集団的教育活動を体験させることを目的としている。プリスクールに在籍していない就学前の子どもが利用できる。無料で、利用登録の必要もない。ここでは、子どもには遊び仲間を、親には同じ状況にある他の親と出会う機会が提供されている。プリスクールのスタッフから保育に関するアドバイスも得られる。保育ママも利用でき、家庭保育所の子どもも、保育ママに連れられてここに来ている。

B　学童保育（就学児童を対象）

①余暇活動ホーム（fritidshem）----- 就労や就学などで親が家庭にいない9歳までの就学児童を対象としている。1980年代中頃から、活動は義務教育システムと密接にリンクするようになる。1990年代には教育的・組織的・財政的理由から、多くの学童保育の場所は基礎学校の建物内に移動し、学校との協同体制が取られている。余暇活動ホームは、夏休みや春休みなど学校が休みの期間も開設されている。ここは、プリスクール・クラスに所属する6歳児も受け入れている。通常、親の就労・勉学などで一日中ケアを必要とする子どもは、プリスクール・クラスに参加する前と後に余暇活動ホームに居る。この余暇活動ホームは登録制で、子どもを登録している保護者はコミューンで決められた料金を支払わねばならない。

②オープン余暇活動（öpen fritidsverksamhet）----- 就労や就学などで親が家庭にいない10歳～12歳の就学児童を対象としている。子どもの参加は通常登録されない。市が助成金を出しているので、親の会費負担は少ない。

③保育ママによる学童保育 ----- 学校に行きはじめた子どもを保育ママが預かっている場合で

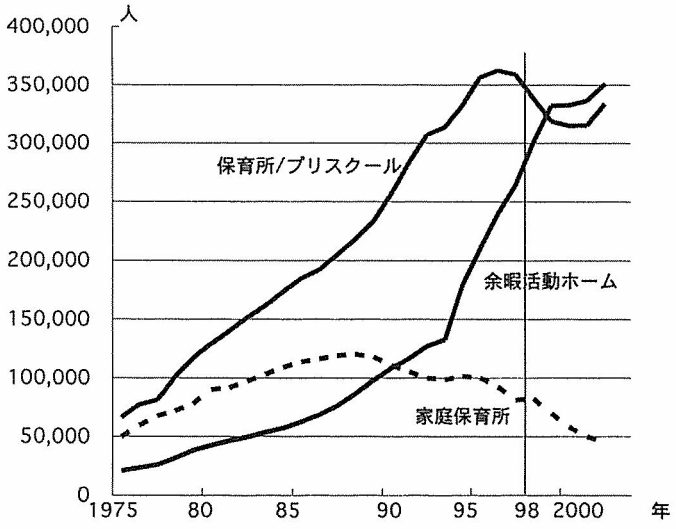
ある。ほとんどの子は、余暇活動ホームに登録しているので、その利用は少ない。

（3）保育事業への児童登録数と割合

学校庁の報告書（Skolverket　2003）によると、スウェーデンでの保育事業は、図1のように1970年中頃から急速に拡大し、保育所の子どもの登録数は1996年には362,169人に達する。その後一時期、出生率低下および6歳児のプリスクール・クラスへの移籍により減少するが、プリスクール入所資格対象の範囲拡大により、2002年には333,646人と再び増加を示す。一方、家庭保育所は1990年まで増加していたが、それ以降は減少し、2002年には45,260人になっている。余暇活動ホームは1970年中頃から増加するが、とりわけ1994年以降急増している。

表1は、2002年の年齢グループ別に保育事業に登録している子どもの人数と割合を示したものである。スウェーデンでは、「乳児は家庭で保育する方が良い」という考え方が一般に支持され、また有給の育児休業制度が整っていることから、1歳以上になってからプリスクールに入所するのが一般的になっており、1歳未満でプリスクールや家庭保育所に預けられている子どもは29人にすぎない。1～5歳の子どものうち保育事業に登録している割合は、プリスクール72.2%、家庭保育所8.2%で、合計80.4%にも及んでいる。これらに登録している合計割合をさらに詳しく見ると、1歳児では40%、2歳児で75%、3歳児で80%、4歳児で83%、5歳児では84%と、年齢が高くなるほど上昇している。なお、プリスクールは全国で2,300カ所存在し、76のコミュー

図1　保育事業への子どもの登録数の推移（1975-2002年）



資料　：Skolverket,1998,Barnomsorgen i siffror 1998-Barn och personal　(Rapport NR152),
およびSkolverket.2003、Descriptive data on childcare,schools and aduli education in Sweden 2003
(National agency for education report no.236)より作成。

ンが朝7時から夕方6時半まで開設しているプリスクールを設置している。

オープン・プリスクールの数は、1990年代を通じて減少し、1990年初めには1,600カ所存在していたが、表2のように2002年には半分以下の708カ所になり、しかも1週間に16時間以上の開設しているものが全体の半数（43.4%）を割っている。なお、オープン・プリスクールは登録制でないので、子どもの実際の利用状況の情報はない。

次に、学童保育についてみると、表1のように、6歳～9歳児で保育事業に登録している割合は、家庭保育所1.6%で極めて少なく、余暇活動ホームの登録が72.6%と多い。保育事業の内で、過去10年間に最も増加しているのが余暇活動ホームの登録である。年齢別に詳しく見ると、6歳では79%、7歳では80%、8歳では75%、9歳では60%と、年齢が上がるにつれて登録割合は減少している。

オープン余暇活動は、2002年にはスウェーデンの76のコミューン（全体の26%）で組織されているが、2001年よりも3コミューン少ない。2002年には全国617カ所存在するが、2001年より10カ所減っている。全体の80%は1週16時間以上開設しているが、10歳ぐらいになると、サッカーチームやいろいろな愛好会などがたくさんあり、オープン余暇活動に参加する子どもは年々少なくなっている。

表1　年齢別、保育事業に登録している子ども人数と割合（2002年10月15日）

	登録子ども人数(人)					子ども全体に対する登録割合（%）			
	1歳未満	1～5歳	6～9歳	10～12歳	全体（0～12歳）	1～5歳	6～9歳	10～12歳	0～12歳
保育事業全体	29	369,213	324,667	335,741	729,650	80.5	74.7	9.4	57.3
公立（コミューン）	23	310,571	2,993,305	32,300	642,199	67.8	68.9	8.5	50.4
私立	6	58,642	25,362	33,441	87,451	12.8	5.8	0.9	6.9
就学前保育	29	368,564	2,526	・	371,119	80.4	0.6	・	29.1
公立（コミューン）	23	3,310,073	1,869	・	3,311,965	67.6	0.4	・	24.5
私立	6	58,491	657	・	59,154	12.8	0.2	・	4.6
学童保育		649	322,141	35,741	358,531	0.1	74.2	9.4	28.1
公立（コミューン）	・	498	297,436	32,300	33,024	0.1	68.5	8.5	25.9
私立	・	151	24,705	3,441	28,297	0	5.7	0.9	2.2
就学前保育									
プリスクール	18	331,102	2,526	・	333,646	72.2	0.6	・	26.2
家庭保育所	11	37,462	・	・	37,473	8.2	・	・	2.9
学童保育									
余暇活動ホーム	・	649	315,335	83,521	350,744	0.1	72.6	9.1	27.5
家庭保育所	・	・	6,806	1,757	7,787	・	1.6	0.3	0.6

資料：Skolverket, 2003, *Descriptive data on childcare, schools and aduli education in Sweden 2003* (National agency for education report no.236) P.17.

表2　オープン・プリスクールの数

年	1998	1999	2000	2001	2002
スウェーデン全体の数	928	869	805	752	708
1週16時間以上開設している割合（%）	69.9	44.2	44.1	41.6	43.4

資料：Skolverket, 2003, *Descriptive data on childcare, schools and aduli education in Sweden 2003*

地域的には、地方よりも都市の方が女性の就労率が高く、公的保育の利用割合が多い。2002年の1～5歳児のプリスクール登録割合は、大都市では76.3%であるが、地方コミューンでは61.6%となっており、余暇活動ホームの登録割合も大都市では48.9%で、地方コミューンの36.9%より多い。一方、家庭保育所は大都市では4.1%で、地方コミューンの方が14.9%と多い。

コミューンの保育事業以外に、民間の保育事業もある。近年、「子どもの保育形態を自由に選択しうる」という原則のもとで私立のプリスクールや余暇活動ホームが発展してきている。たとえば、プリスクールに登録している子どものうちで、私立のプリスクールに登録している割合は、1998年には13.3%であったが、2002年には16.7%に増加している。余暇活動ホームのうちで私立の割合は、1998年では4.6%で、2002年には8.0%と2倍近くに増えている。

私立のプリスクールの内容をみると、共同組合形式の保育所、教会などの団体によって提供されている幼稚園、モンテッソリーの教育理念に基づき特別の教育法を取り入れた私立幼稚園などで、これらはコミューンにより財政的補助を受けて運営されているので、親の料金負担額は同じである。民間の保育事業の中で、最も一般的なものは共同組合形式のプリスクールである。

2．プリスクールの学習プラン概要

国はプリスクールに対して全体的な目標と方針に責任をもち、コミューンがその実施に責務を負っている　教育省は、1994年にすでに基礎学校・プリスクールクラス・余暇センターのための学習プラン（Lpo 94）と私立学校のための学習プラン（Lpf 94）を定めていたが、加えてプリスクールのための「1998年プリスクール学習プラン」（Läroplan för förskolan: Lpfö 98）を作成し、知識・発達・学習について共通した観点から、学校を互いに関連付けるように図った。

このプリスクール学習プランは、国が個々のプリスクールを査定するときの評価基準となっており、またプリスクールにとっては運営の手引書となっている。

この「1998年プリスクール学習プラン」は、第1章の「プリスクールの基礎的価値と任務」と第2章の「目標とガイドライン」の2部構成からなり、「1994年基礎学校学習プラン」の形式を受け継いでいる。以下、その内容を詳しく見ていこう。

（1）プリスクールの基礎的価値と任務

第1節の「基礎的価値」では、プリスクールの基本的理念が表明されている。まず、社会の基礎的価値として民主主義がプリスクールの土台に置かれ、プリスクールでの活動は民主主義的価値観に基づき遂行されるべきであることが謳われる。

人間生活の不可侵性、個人の自由、統合、すべての人々への対等な価値、男女平等、弱者への連帯は積極的に促進すべき価値であり、プリスクールでの活動の重要な任務は、子どもがこうした社会の基礎的価値を身につけることを助けることにある。

子どもは具体的な経験を通して、倫理的価値と規範を習得していくので、スタッフの態度は子どもの民主主義への理解に大きな影響力をもっている。したがって、日々の活動の中で基礎的価値が明瞭にされることが要求される。プリスクールは民主主義的形態で運用されるべきであり、子どもはその経験を通じて、社会への責任と関心を抱き、社会生活に活発に参加するように成長していくとみなされている。

第2節の「理解と他者への共感」では、団結力と忍耐力を早期に確立できるように、プリスクールでは、責任をもって社会生活を営なめる能力を発展させることが課題とされる。子どもを激励し、子どもの共感力を強め、他人の内面を理解する能力を育成していく。社会の国際化の進展とともに、プリスクールでも文化的多様性がみられる。民族的出自にかかわらずお互いを尊重する土台を築いていくための機会を子どもたちに与える重要性を指摘している。

第3節の「客観性と包括性」では、プリスクールは異なる意見・解釈をオープンに表現することを奨励し、子どもは自分独自の考えを形成し、個々の環境を考慮して選択する機会を与えられることとしている。また、子どもが特定の見方に偏ったり、先入観を持たないように育つことをすべての親に保証するとしている。

もっともこれは、プリスクールがあらゆる価値観から自由・中立的であることを意味しない。プリスクールで活動しているすべての者は、前述の基礎的価値をもつべきであり、これらと対立している価値観から距離を保つべきで、時には積極的にそれに対抗していかねばならないとしている。

たとえば、大人からの少年や少女に対する異なる要求や期待が、子どもたちの女らしさや男らしさの意識形成に影響しているとみなし、伝統的なジェンダー役割に対抗すべきであると述べられている。ステレオタイプのジェンダー役割によって少年・少女の行動が制限されないように、能力の発展・追求に対して同じ機会を提供しなければならない。

第4節の「プリスクールの任務」では、プリスクールは生涯教育のための基礎と位置づけられ、プリスクールでの活動はすべての子どもにとって、楽しく、安全で、学び豊かなものであるべきであり、保育と学習が全体として結びついた良質の教育的活動を提供することがプリスクールの任務とされている。この活動は家庭との協同作業によって促進されるべきものであり、それぞれの子どものニーズに合ったものでなければならない。プリスクールのスタッフには、子どもと気持ちを通じ合わせ、親の信頼を得ることが求められる。

子どもは、さまざまな生活環境の中で暮らし、体験から物事を捉え、意味を形成していく。子どもが信頼感や自信をもつように支援し、子どもの好奇心・野心・関心を刺激し、学習意欲を高めるようにしなければならない。子どもの能力・文化的創造力を発展させるだけでなく、世代から世代へと文化的遺産（価値観、伝統、歴史、言語、知識）を伝達していくこともプリスクールの任務に含められている。さらに、国際化する社会の中で、多様な文化・価値への理解能力を発達させることもプリスクールの任務とされている。スウェーデン語以外の母国語をもつ子どもに

対しては、スウェーデン語と母国語の双方を発達させる機会を保障しなければならない。

コミュニケーション能力、新しい知識への探求力、協同作業能力は、情報化社会において必須のものとされ、それらの能力の基礎を育むことがプリスクールの教育的活動として要請されている。子どもの発達と学習を促進するために、遊びを意図的に利用することが、プリスクールでの活動の特徴である。遊びは子どもの発達と学習にとって重要な位置を占めている。遊びを通じて、空想・洞察・コミュニケーションの能力が高められ、抽象的思考と同時に協調性や問題解決能力も養われていく。

子どもの発達と学習を促進するために、お絵描き、歌、音楽、劇、リズム、ダンス、体操などのさまざまな表現形態を用いることが奨励される。また、子どもの言語発達を刺激し、言葉を書くことに対する好奇心・関心を抱かせることも重要視される。さらに、エコロジーの観点と未来志向的活動がプリスクールの特徴として挙げられている。

（2）目標とガイドライン

2章の「目標とガイドライン」は、1．規範と価値、2．発達と学習、3．子ども自身の影響力、4．プリスクールと家庭、5．プリスクールクラス、基礎学校、余暇センターとの協力、の5節から構成されている。目標では、プリスクールでの仕事の意図、目指すべき活動の質を明示し、ガイドラインでは、その目標にそって仕事を遂行するために、プリスクールで働く人全員や作業班の責任を箇条書きで明確化している。1、2節の部分は1章で述べられたことをより具体的に展開したもので、3節は民主主義の学習という観点から子どもの影響力について、4、5節ではプリスクールと他の集団との関連性について述べている。

規範と価値

スウェーデンの学校教育においては、民主主義が社会の基礎的な共通価値として最も重要視されている。この節においても、はじめに「プリスクールでは、我々の社会において共通の価値としている民主主義を、子どもが理解し徐々に身につけて成長していくように、刺激を意図的に与えていくべきである」と述べられている。子どもの発達促進のためにで努力すべき目標として、以下の点を箇条書きで挙げている。

- 開放性、尊厳、団結、責任
- 自ら進んで他者を援助するとともに、他者の状況を考慮し共感する能力
- 日常生活でさまざまな倫理的ジレンマや根本問題を発見・熟考し、自分の態度を決める能力
- 性別や社会・倫理的な背景に関係なく、すべての人が同じ価値を持っていることへの理解
- 周囲の環境に配慮した上で、あらゆる形態の生活を尊重

ガイドラインとして、プリスクールで働くスタッフ全員は、個人を尊重し、プリスクールにおいて民主主義的雰囲気作りに協力し、子どもに帰属意識と責任感をもたせて団結力を示す機会を

与え、子ども同士の相互理解を深めて衝突解決の手助けをすることが挙げられる。

さらに、作業班の責任として、以下のことが要請されている。

・それぞれの子どものニードを尊重して充足させ、子ども自身が価値ある存在として感じられるようにする。
・子どもが活発に参加できるように民主的な活動のやり方を提供する。
・倫理的ジレンマや生活問題を重視して取り組む。
・人の意見や行為を規定している価値観や態度は多様であることを子どもに気づかせる。
・仕事に対する規範を高め、子ども集団のための活動に参加する責任を負う。
・子育てに関して家庭と協力し合い、プリスクールの規則や対応について親と話し合う。

発達と学習

まず始めに、プリスクールは教育的アプローチに基づき、そこでは、世話と養育と学習を緊密に結びつけるべきであるとして述べている。さらに、子どもの学習と発達を刺激・鼓舞するように教育的活動が遂行されねばならないとし、その活動は、遊び・創作・学習の喜びを促進するとともに、子どもが新しい経験・知識・技術の習得に関心を強めるもので、子ども自身や周囲の世界についての理解も発展させるもので、子どもの経験・関心・ニード・意見に基づくものであるべきとされている。プリスクールの努力目標としては、子どもに保障すべき事柄が以下のように箇条書きで挙げられている。

・子どものアイデンティティを発展させ、安定感を与える。
・遊びと学習能力とともに、好奇心と意欲を発展させる。
・自律性を高め、自分の能力に自信をもたせる。
・自分の文化に関与し、他の文化への尊敬心を発展させる。
・聴き、話し、熟考し、自分自身の意見を表明する能力を発達させる。
・集団の中での衝突を処理する能力を高め、共通のルールに対する責任、権利と義務を理解させる。
・健康維持の重要性への理解を深め、運動能力・調整能力・身体感覚を発達させる。
・概念に含まれる意味を修得し、関連性を読み取り、環境理解の新しいやり方を発見させる。
・豊かな話し言葉、コミュニケーション能力、意見表明能力を発達させる。
・語彙と概念、言葉遊びの能力、書き言葉への関心、シンボルの理解を発達させる。
・創作能力、遊び・絵・歌・音楽・踊り・劇など、多くの異なる表現形式で考えや体験を伝える能力を発達させる。
・異なる資料と技術を使いながら、製作・創造・デザインしていく能力を発達させる。
・数量・空間・時間の概念の基本的特徴を理解させる。
・自分自身が自然の循環の一部であることの理解や、植物や動物の知識を通じて自然現象につい

ての理解を発展させる。

次に、プリスクールで仕事している人すべてに対するガイドラインとして、活動・遊び・学習にとって良い環境を提供するために協力しあうこと、特に特別の援助を必要とする子どもに注意を払うことが挙げられている。

作業班に対するガイドラインとして、子ども集団の中で仕事をする時に保障しなければならない項目は、以下の通りである。

・子どもの潜在能力に応じて、すべての子どもの能力を刺激して発達させていく。
・新しい事柄の学習が楽しく意義深いものであることを体験させる。
・新しい技術・体験・知識を修得することで、意欲を刺激し、新しい挑戦を受け入れさせる。
・社会的発達への援助と刺激を与える。
・継続的関係を築き、集団にいて安心感を得られる良い条件を与える。
・話すこと、コミュニケーションをする活動への援助と刺激を与える。
・運動能力を刺激する。
・バランスの良い規則的なケアを提供する。

さらに、作業班に対するガイドラインとして、①子どもの知識欲・学習欲・喜びに関心を払い、子どもが自分の能力に自信をもつようにさせる、②さまざまな障害をかかえている子どもに刺激を与え、特別の援助を与える、③子どもの好奇心を刺激し、書き言葉と算数への初歩的理解を深める、④自分自身の行為が環境にいかに影響するかを理解できる機会を与える、⑤地方の文化に親しむとともに、身近な環境について学習できる機会を与える、などが挙げられている。

子ども自身の影響力

前述したようにスウェーデンの学校教育では、民主主義が社会の基礎的な価値規範として最も重要視され、子どもが民主主義とはなにかを理解するための土台を提供することがプリスクールの任務とされている。

日本では、「民主主義」とは「多数決で物事を決めること」と矮小化されて捉えられる傾向が強い。もともと民主主義の言葉はギリシャ語に語源があり、人民が選んだという意味である。つまり、独裁的社会ではたった一人か少数の人々により権力が行使されるが、民主主義社会では人民自身が影響力をもって自らをコントロールするのである。様々な意見を表明することが、民主主義社会では権利として保障されるが、同時に社会に対して義務も伴い、自分の行為に関して責任をもたなければならない。そこでプルスクールでは、子どもに民主主義とは何かを体験させるために、子どもの影響力に焦点があてられ、努力すべき目標として、3項目が挙げられている。

・自分の考えや見解を表明する能力を発達させ、それによって自分の状況に影響を及ぼす機会を与える。
・自分の行為とプリスクールの環境に対する責任能力を発達させる。

・共同作業と意志決定過程にさまざまな形で参画することを通じて、民主主義の原則を理解し、それに基づき処理する能力を発達させる。

プリスクールで仕事している人すべてに対するガイドラインとして、①子どもがプリスクールで影響力を行使できるように、責任を取る能力と意欲を発達させるように活動することと、②それぞれの子どもの意見や見方を尊重するように活動すること、が述べられている。さらに作業班には、以下のことが要求されている。

・子どもの能力、自己責任願望、子ども集団への参加を活用する。
・すべての子どもに、能力に基づき、活動内容・仕事方法・活動評価への参画に関して影響を及ぼす機会を与える。
・活動参画の規模や影響力について、男女平等の尺度で扱う。
・民主主義社会において割り当てられている責任・権利・義務を、子どもにも割り当て・分担させる。

プリスクールと家庭

保護者は自分の子どもの養育と発達に責任をもち、プリスクールはそれぞれの子どもが豊かに多面的に発達することができるように最善の環境を創ることで、家庭と補完しあう関係にある。したがって、プリスクールは家庭と親密な信頼関係のもとで協力し合い、親はプリスクールの活動に影響力をもつべきである。それゆえに、プリスクールは保護者にプリスクールの目標と内容を明らかにしなければならないとされている。

プリスクールで仕事をしている人すべての責務として、親に敬意を払い、プリスクールのスタッフと子どもの間の信頼関係を発展させることが述べられている。さらに作業班のガイドラインとして、以下のことが挙げられている。

・子どもがプリスクールにスムーズに入所できるようにする責任を親とともにもつ。
・子どもの親と発達についての面談を行うとともに、プリスクールの内外において、子どもの福祉・発達・学習について話し合いを継続的に行う。
・教育的活動プランの目標の具体化において、親が影響力を行使できるように機会を与える。
・活動の計画・遂行の際に、親の立場を考慮する。

プリスクールクラス・基礎学校・余暇センターとの協力

この節では、プリスクールが子どもの全面的な発達と将来に向けた学習を援助するために、プリスクールクラス・基礎学校・余暇センターとの良好な協力関係を築くように努力すべきことが挙げられている。作業班は、プリスクールクラス・基礎学校・余暇センターのスタッフと自分たちの知識と経験を交換し合い、特に援助と刺激を必要としている子どもに対して一緒に注意を払っていくことが任務とされている。

3．プリスクールでの実践活動

以上のようにプリスクールは、1998年以来の教育改革で、独自の学習プランをもつようになり、生涯学習のための土台を築く重要な場としてスウェーデンの学校教育システムの中に位置づけられるようになった。そして、プリスクールの活動は、民主主義的価値に基づき、参加しているすべての子どもにとって教育的であり、喜びと安心を与えるものでなければならず、ケア-養育-学習が全体として結び合わされたものでなければならないとされている。近年、エデュケーション（教育）とケア（世話）を結びつけたエデュケアリング（学習支援）という用語が使われ、プリスクールのスタッフには家庭の代替として単に子どもを預かるのではなく、子どもの学びを支援することが期待されている。また、プリスクールの現場では、国の「1998年プリスクール学習プラン」にそって、それぞれの地域に合った具体的な活動プランを作ることが要請されている。

この節では、この学習プランの理念・目標・指針が、現場のプリスクールにおいてどのように具体化されているかを、イェーテボリ市オリグリー地区の事例を通して見ていこう。

（1）学びの木 —— プリスクール学習プランの具体化

オリグリー地区では、1998年施行の教育改革に備えて、プリスクールの職員は1年前から準備を始め、子どもをどう見るべきかについて2年間にわたって3週間に1回の間隔で研修会を行っていった。その成果の1つが、1998年の学習プランを自分たちで解釈し表現した「学びの木」である。

図2の「学びの木」は、プリスクールのスタッフの任務（親と協力して子どもという木が成長するようにエネルギーを与えること）と活動を目に見える形で具体的に表現したものである。また、根は基本的価値・共通の立場を、幹は子どもを、枝はプリスクールの活動を、葉はプリスクールの先生がそれぞれの活動をどのように行うかを示している。「学びの木」のポスターは、オリグリー地区のプリスクールの入り口の壁などに貼ってあり、先生と保護者が常に共通の価値・目標を確認し合えるようにしている。

ここでは、ボルガレガータン（Borgaregatan）プリスクールのスタッフがまとめた『私たちのビジョン：生活において言葉に喜びを感じる子どもたち（Vår vision : Barn med språkglädje för livet)』のパンフレットから、その内容を紹介しよう。

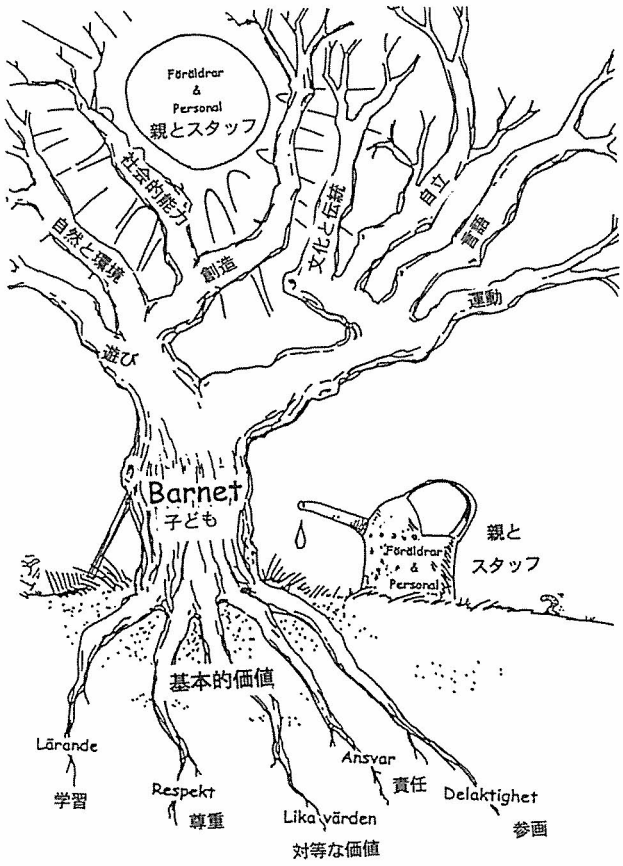
木の根：基本的価値・共通の立場

木の根で描かれているのは基本的価値・共通の立場である。そこでは、スタッフ・子ども・親がともに努力して身につけなければならないものとして、参画、責任、対等な価値、尊重、学習の5つが挙げられ、それぞれの具体的内容が説明されている。

参画では、①みんなが自分の意見を持ち、相互の関係の中で、互いの言葉を解釈し、身体言語

を学ぶ、②子どもに質問し、子どもの言葉を聞いて、子どもとの関係を作っていく、③みんなが決定に参加していくことが目指される。責任では、①自分の行動に責任を持つ、②環境に責任を持つ、③周りの人に対して責任を持つ、④子どもに対立の対処の仕方を教えることが挙げられている。対等な価値では①性別・文化・発達レベルの違いに関わらず、個人の持つ可能性に基礎をおいて取り扱う、②自分の独創性に自信をもたせる、③子どもの積極的な能力を強める、④集団の中で連帯を感じさせることが、尊重では① 互いの意見を聞く、②妥協する、③自分の順番を待つ、④相手の気持ちを理解できる、⑤互いに助け合うことが、挙げられている。学習では①遊びのための良い条件を作る、②自分が学んでいることを自覚できるようにする、③私はできる・やりたい・適しているという状況を作る、④実際の活動を通じて、自分を引き出す機会を子どもに与える、ということが挙げられている。

図2　学びの木



資料：Vår vision：Barn med språkglädje för livet のパンフレットより

枝と葉：目標と方法

枝ではプリスクールの目標が8領域（①自然と環境、②文化と伝統、③創造、④言語、⑤遊び、⑥社会的能力、⑦自立、⑧運動）に区分して設定され、葉ではスタッフがそれぞれの目標を日々の活動においてどのように実現させていくのかが、年少組（1～3歳未満）と年長組（3歳～6歳）の2グループに分けて示されている。

年長組の内容を紹介すると、「自然と環境」では、子どもは自然と環境に責任をもち、保護することができることが目標とされ、具体的方法として、自然の観察、森への遠足や森からゴミを除くことが挙げられている。「文化と伝統」では、スウェーデンの祝祭日を祝う、いろいろな言葉が異なる言語でどのように呼ばれているかを調べるなどで、自分たちの文化と伝統を経験するとともに他の文化と伝統の理解を深めることが目標とされている。「創造」では、さまざまな方法で自己表現できるようになることが目標にされ、自分の問題を解決できるように励ます、自分の体を使って表現する、多様な教材を提供し、さまざまな技術を試すことなどが方法として挙げられている。「言語」では、子どもが会話・書き言葉・身体言語を通じて自分や他者を理解することが目標とされ、子どもに自分の状況や日々の出来事を語らせる、本を読む、質問に答えて書くことを奨励することが方法として考えられている。「遊び」では、子どもが一人でも集団の中でも遊ぶことができるようになることが目標とされ、おもちゃを交換することや集団の中で分配することなどが方法として述べられている。「社会的能力」では、社会の規範・価値観に基づき、他者と親しく付き合えることが目標で、順番を待つ、共同作業を通じて問題解決していく、遊びのルールを理解するなどが方法として挙げられる。「自立」の目標は、子どものアイデンティティを強化し、自分でできる、価値ある存在と感じさせることである。「運動」では、跳ねる・走る・登る・リズム体操・歌・ダンスなどで、子どもが身体を意識的に使い、体を動かすことに喜びを感じるようになることが目標である。

（2）ウッデヴァルガータン（Uddevalgatan）プリスクールでの実践

「1998年プリスクール学習プラン」や「学びの木」が現場でどのような形で活用・反映されているかを、我々が2003年10月に訪問したオリグリー地区にあるウッデヴァルガータン・プリスクールの視察・インタビューから見てみよう（森　2004）。

クラス編成と職員構成

クラスは、年少組（1～3歳）と年長組（3～5歳）の2つに分けられている。それぞれのクラスに3人の先生が配属されている。年少組には16～18人（その時によって異なる）の子どもが、年長組には20人の子どもがいる。子どもの入園は8月が多いが、欠員が出ると、途中でも入ってくる。年少組から年長組のクラスに移る時期ははっきりとは決められていない。子どもの発達状況を考慮しながら、3歳から3歳半ぐらいで年長組のクラスに移る。

先生にはパート職員はおらず、フルタイムの先生が時間を調整して担当している。先生が病気の時には臨時職員が派遣されてくる。厨房にもスタッフが1人配属されているが、その人は近くの高齢者住宅から運ばれてきた昼食を配膳するだけで、料理を作らず、午後からは必要なところのクラスを手伝っている。以前はここで食事を作っていたが、合理化の1つとして、スタッフの人数を減らすために、1995〜96年頃から配給になった。

プリスクールは朝6時30分から始まるが、そのときは両方のクラスの子どもを一緒に見ている。朝ごはんを食べる部屋があり、朝早くに来る14人ほどの子どもは、朝食を食べて来きていないので、ビュッフェ形式で朝食を取る。親にフレックスタイム勤務の人が多く、9時頃が子どもの数が一番多くなる。夕方の6時30分までプリスクールは開いているが、子どもがプリスクールに居る時間を短くするように、親たちは時間調整の努力をし、3〜4時頃には大半の親が迎えに来る。スウェーデンでは、9歳以下の子どもがいる親は週30時間以内の労働という規定が法律で定められているので、金曜日は出勤せずに、子どもを家庭でみている親も多いという。

所長はいくつかのプリスクールを掛け持ちで監督し、所長の机（事務所）は基礎学校にある。それについて、所長のルイーズさんは、子どもが基礎学校に進学してくるので、そこに机があった方が都合良いからだと言う。

ウッデヴァルガータン・プリスクールは、改革前は保育所と呼ばれていたが、イェーテボリで3番目に古く、1917年に設立され、2階は未亡人になった人のための母子寮だった。スウェーデンでは近年、高齢者が多く、労働している若者世代が少なくなり、労働力人口が減少して国家予算が緊迫し、学校教育・高齢者・児童福祉に対して縮小政策がとられている。そして幼児教育に使う予算も縮小されてきている。そのためにここのプリスクールでは、1990年に1〜3歳児のクラスには子ども12人に対してスタッフが4人配置されていたが、今では子ども16人にスタッフ3人になる。3〜5歳児クラスでも、1990年には子ども16人に対してスタッフが3人だったが、今では子ども20人でスタッフ3人になっている。

先生のピアさんは、現在このように職員の人数が減っているが、今の方が優れた活動をしていると言う。次は、学習する場としての変化を見ていこう。

学習する場としての変化

名称が保育園からプリスクールになったことが、スタッフや保護者のみんなに大きな意識改革をもたらした。ピアさんは、「子どもが小さい時から学ぶことがわかったから、プリスクールはふつうの家庭のように子どもをただ預かるのではない。ここでの全部の活動に教育的要素を入れている。たとえば、食事はすごく重要な教育の機会で、みんなで集まって話しながら食事をする。その時に、左右・前後など色々な言葉を教えたりしている。私たちの任務は、子どもが学習することを支援することである。私たちの立場を親にも常に説明している」と言う。

教育というと、日本では知的教育を多くの人が思い浮かべるが、スウェーデンではもっと意味

が広く、プリスクールの教育では社会化教育が中心になっており、社交的な人間になることが目指されている。日本では、3・4・5歳はそれぞれのクラスに分かれていることが多いが、スウェーデンでは年長組として同じクラスである。年齢の違う人とのコミュニケーションのやり方を教えるためには、むしろ一緒の方が有効的であると考えられている。

暦年齢でなく、個々の子どもの発達段階に焦点をあてて、活動が組み立てられている。たとえば昔の保育所では、読み書きを教えないことになっていた。現在は、積極的には教えないが、禁止はしない。小さい子どもでも、紙に書くことに興味を示したら、刺激を与えるように変わった。その結果、4歳や5歳でも文字を認識できるようになってきている。

学びの機会を子どもにたくさん与えることで、成長が促進される。その点も現在非常に重要視されている。以前は6歳にならないと二輪車に乗せなかったが、現在では、4歳でも関心のある子どもには乗せている。

民主主義教育

民主主義がスウェーデン社会の根本的価値とされ、民主主義教育がプリスクールの学習プランでも重視されているが、実際にはどのような形で行われているのであろうか。ピアさんは、遊びを通じて民主主義を子ども達に教えていると言う。小さい子では遊べない子がいるので、まず遊び方を教える。次に、人と一緒に遊ぶことを教える。誰かと遊ぶには、他者とコミュニケーションが必要で、言葉でコミュニケーションすることを教える。おもちゃの順番を待つこと、話し合いで問題を解決することなどを覚える。時には、喧嘩になって先生を呼びに来るが、先生は両方の話をよく聴き仲裁する。その過程で、子どもは暴力を使わず話し合うことを身につけていく。

民主主義教育で重要なことは、物事の決定過程に自分の意見を反映できるという感覚・体験である。ピアさんは、子どもの意見に大人たちが耳を傾けてくれていることを、意見を述べた成果が出ていることを、子どもが日常生活で体験できるように心がけていると言う。それの具体的な例を示してくれた。

このプリスクールでは、個人面談を年に2回行っている。それには、親と子どもが出席する。子どもには、このプリスクールの良い点・嫌な点・変えて欲しい点などを尋ねる。嫌な点・変えて欲しい点があれば、どういう風にして変えるかを計画する。たとえば、子どもが「レゴで遊んでいる時、中断されて嫌だった」と答えたので、レゴをしているときは続けていいことにした。すると、子どもは満足する。次の面談の時に子どもに「よくなったか」と尋ねると、「よくなった」という反応が返ってきたとのことである。

さらに、民主主義教育では、考え方や問題解決の仕方の多様さを教えることが重要であるとピアさんは指摘する。そのために、子どもに正解を教えるのではなく、課題をベースにし、子どもから提案させ、意見を出させるようにしているとのことである。たとえば、紙の長さを測るときに、ものさしで測るという子、紐をもってきて測る子、指で測る子、…どれも正しいことを教

えている。

記録フォルダー：参画と評価

オリグリー地区では、子ども達の発達過程を記録するために、１人１人の子どもについての記録フォルダーを考案し、1999年から実施している。今やそのフォルダーはスウェーデン全体に広がっている。所長のルイーズさんは、その意図を次のように説明している。

スウェーデンでは、多くの子がプリスクールに入所しているが、全員ではない。だから、プリスクールの学習プランは、５歳までに「到達させなければいけない」ではなく、「到達できる可能性を与える」となっている。５歳の時までに、学習プランに記述されている項目の機会があったかどうかである。つまり、１歳までに何をしなければならないか、２歳の時には何をできなければならないかを述べていない。しかしながら、基礎学校への移行をスムーズにするために、子どものそれぞれの成長の過程を記録することが重要と考え、プリスクールでの子ども達の活動成果を年齢段階順にファイルすることにしたとのことである。それが記録フォルダーである。

新しい子が入所してくると、その子向けにフォルダーを作る。これを見ると、プリスクールで子ども達がどんなことをしたかが分かる。しかしながら、この記録は固定的で絶対的なものではなく、修正可能である。たとえば、子どもが５歳になってから３歳の時に書いたスペルが間違っていることに気付き、変えたいと思ったら変えて良いことになっている。自分のフォルダーだから、自分で直して良い。子ども自身が誤りに気付くということも重要であり、子どもの意思を反映させている。それは子どもの「参画」の１つだという。

スウェーデンでは、「保護者の参画」も重視されている。学年始めには、学習プランを土台にして、１年間の園全体の計画書と１人１人の子の成長計画書を作る。それを保護者に渡して意見も聞き入れ、合意のもとに計画を進めていく。学年の終わる前の６月頃に、子ども１人１人の目標に対して、さらにプリスクールの目標に対してどうだったかの評価が保護者に提示され、保護者会や個人面談の時にはその評価をめぐって話し合いが行われる。評価においても子どもや保護者の参画が重視されている。

****

「1998年プリスクール学習プラン」では、プリスクールの基礎的価値と任務、さらに活動のための目標とガイドラインが明文化されているが、いかにしてその目標を達成するかは述べられていない。目標達成のための具体的な方法を考案していくことがプリスクールで働くスタッフの重要な課題とされている。プリスクール学習プランでは、プリスクールでの活動は民主主義的価値観に基づき遂行されるべきであることが謳われ、団結力と忍耐力を早期に確立し、社会生活を責任もって営なめる能力を子どもに身につけさせることが目標とされる。イェーテボリ市オリグリー地区の事例のように、各々のプリスクールではその目標達成に向けて具体的な努力がなされているのである。

注

（1）保育のこの2つの目標については、1968年の全国保育委員会の報告書において、すでに述べられている。その報告書が保育システムの拡大の出発点となったと言われている。

付記

2003年度の追手門学院大学特色ある個人研究費の補助を受け、パートナー関係や家族さらには民主主義がスウェーデンの学校教育の中ではどのように教えられているかについて研究することを目的として、2003年10月2日から14日までスウェーデンの基礎学校およびプリスクールを視察した。本稿では、プリスクールの視察を中心に報告しているが、別の機会に、パートナー関係や家族に関する学校での教育について、教科書分析および基礎学校での視察に基づき、論ずる予定である。

謝辞

我々の研究意図を理解し、快く視察を受け入れ、インタビューにも丁寧に応えてくださった方々に、この度のスウェーデン視察のコーディネイトおよび通訳をしていただいた友子・ハンソン氏に、心より感謝申し上げます。

参考文献

* Borgaregatans Förskola, 2002, Vår vision:Barn med språkglädje för livet.
* Gunnarsson,Lars & Barbara Martin Korpi & Ulla Nordenstam, 1999, Early Childhood Education and Care Polic in Sweden : Background report prepared for the OECD Thematic Review, Regeringskansliet.
* 森陽子、2004『家庭科教育と家族』（追手門学院大学、修士論文）。
* Skolverket, 1998, Barnomsorgen i siffror 1998-Barn och personal (Rapport NR152).
* Skolverket, 2003, Descriptive data on childcare, schools and adult education in Sweden 2003 (National agency for education report no. 236).
* Utbildningsdepartementet, 1998, Läroplan för förskolan (Lpfö 98), Fritzes = Ministry of Education and Science in Sweden and National Agency for Education,Curriculum for the pre-school (Lpfö 98), Fritzes.
* Socialdepartementet, 1996, Barn idag, Ds 1996: 57.
* 善積京子、1999、「子育て期の家族」、善積京子（研究代表者）『スウェーデンの家族福祉政策と家族関係の関連性についての研究』（平成10年度科学費補助金（国際学術研究）研究成果報告書）11-50頁。